

報告

ソフィア哲学カフェ・シネマ哲学カフェ： 対面でも、オンラインでも

寺田 俊郎

昨年度の「ソフィア哲学カフェ」は、一昨年度に引き続き、オンライン開催とし、日本国憲法を読んで考えた。本年度は、毎回別の主題を掲げる通常の哲学カフェに戻し、対面とオンラインで計四回開催した。参加者は昨年より増えて、多い時には研究所のテーブルを囲んで座りきれず、観覧席ができるほどだった。本年度も、毎回のように顔を見せてくださる常連の方々と初めての方々と、また、学内の方々と学外の方々と、混在していた。高校生が来てくれたのは嬉しかった。

取り上げた主題は「自由」「平等」「謝罪」「生きづらさ」である。「自由」「平等」は、ソフィア哲学カフェでもすでに取り上げたことがあるし、街の哲学カフェでも話題にしたことがある。

「謝罪」「生きづらさ」は初めて取り上げた主題である。以下では、まず、同じ主題を繰り返し取り上げることを意味を考え、次に、新たな主題を取り上げるときの視点について、さらに、対話の内容を文字にして残すことの是非について考えたい。

「自由」「平等」は日常的に使われる身近な概念であると同時に、近代社会の基底を成す重要な概念でもある。しかし、その意味をわれわれは本当に理解しているだろうか。近代社会の基底を成す概念である以上、それは一定の明確な意味を与えられ、公教育において教えられなければならないし、教えられている。だが、これらの概念は、教科書的な意味を知ったとしても、その意味を真に理解できるような概念ではない。各人が生きる中で出会う「自由」や「平等」を巡る生の経験に即して、その意味を考え、各人の考えを持ち寄って共に考えることによって始めて、少しわかってきたような気がするのである。それを繰り返して理解を深めるしかない。そこに、哲学的対話の中心的な意義の一つがある。同じことは、「人権」「責任」「差別」「民主主義」など、これまで取り上げてきた主題のほとんどについて言える。

それに対して「謝罪」「生きづらさ」というのは、身近な概念であるという点では「自由」「平等」と同じだが、近代社会の基底を成す概念ではなく、公教育で教えられてもいない。しかし、「謝罪」は人が生きる上で重要な概念であり、その点では「自由」「平等」と似たところがある。それに対して「生きづらさ」は、いつしか日本社会でよく耳にするようになった、流行り言葉のようなものである。そのような何気ない言葉に注意を向けるのも、哲学的対話の面白いところである。そのようなふと気になった言葉の背後に、探求に値する哲学的問いが潜んでいることがよくある。

そのような言葉の例として印象的なのが「義理チョコ」である。もうずいぶん前のことになってしまったが、哲学カフェの仲間の哲学的対話で、参加者が提案した問いに「義理チョコは必要か？」というのがあったそうだ。それで、ぼくの哲学カフェでもその問いを取り上げた。

実に面白い展開になった。われわれは、どこの誰が定めたとも知れない「規範」にいつの間にかとらわれて生きている、ということが明らかになり、それは一体どういうことなのか？という問に進んでいったのだ。「義理チョコ」は、よく言えば意表を突いた面白みのある主題だが、悪く言えば取るに足らない、あるいはふざけた主題である。だが、日常生活でふと気になった些細な問いを立ち止まって考えることが、有意義な哲学的対話に発展することもある。

「生きづらさ」を巡る対話も意外な展開を見せた。この語句は、実は単に「生きるのがつらい」という一般的表現ではなく、比較的最近のある時に日本社会で独特の含みをもって使われるようになった言葉だという気づきがあり、その時期は、バブルがはじけて不景気な時代が長く続いている間ではないか、SNS が生活に浸透し始めて以降ではないか、などの仮説が出された。そして、「生きづらさ」の背景にはマジョリティとマイノリティの関係があるのではないか、マジョリティの感性に対する違和感や疎外感のようなものではないか、などの仮説が出された。対話の大きな転換点になったのは、「生きづらさ」は社会に対する「抵抗」の表現である、という仮説である。それに対して表明されたのが、そういう抵抗の声は以前であればデモや労働組合活動などで表現されていたが、「生きづらさ」という個人の感じ方に矮小化されているのではないか、という仮説である。

普段は主題についてひとしきり意見を述べあってから、哲学的な問いを一つ立ててそれを考えるのだが、今回は「生きづらさ」に関して意見を披露しあうだけで終わった。そういう回があってもよい。十分有意義な対話だったと思う。哲学的対話は自由で柔軟な活動なのである。

最後に、対話の内容を文字にして残すことについて。直近の「生きづらさ」をめぐる対話の内容はかなり覚えているが、しかし、記録していないので詳しく再現できない。「自由」「平等」の回に至っては、内容を全く忘れてしまった。せっかく有意義な対話を楽しんだのにもったいない、と言われるかもしれない。しかし、ぼくの哲学カフェでは録音はしないし、板書もしないし、メモすらとらないのが通常である。対話を基に記事を書く必要があってもメモを残すことはたまにあるが、録音はしない。進行役に集中したいからでもあるし、「記録されている」という意識が参加者の思考や発言に悪影響を与えることを怖れるからでもある。また、対話は、その場に居あわせた人々の間で共有されるものであり、「生もの」であり「一期一会」であって、文字にすれば別物になってしまうと思われるからでもある。

とはいえ、対話を文字にして残すことを全面的に否定するつもりはない。たとえ別物になるとしても、文字として残された対話を読み、さらに考え続けることにはそれなりの意味がある。そういう哲学的思考こそ、洋の東西を問わず、伝統的な哲学が積み重ねてきた営みに近いと言いうるかもしれない。ソクラテスとその論敵の対話や孔子とその弟子の対話を書き留めたもの（『対話編』『論語』）を読み、考えることを繰り返すのが、伝統的な哲学の学びなのだ。しかし、ソクラテスも孔子も対話を行ったが、何も書き残さなかった。孔子がどう考えていたかは知らないが、ソクラテスがもっぱら対話を行った理由はかなり明確に推量できる。ソクラテスは、対話によって新しい考えが誕生することを助ける「助産師」を自ら任じていたことが、その理由だと思われる。書かれたものにはそれができないのだ。

しかし、ソクラテスの対話がプラトンによって文字として残されなかったら、欧州の哲学は

ソクラテスを始祖とすることはなかっただろう。プラトンは、それでも「対話」の形を重視し、ソクラテスの対話を対話として書き記した。師であるソクラテスと同じ思いがあったからだだろう。その対話を演劇のように朗読し、それを聴くことが、哲学的思考のひとつの形になった。だが、プラトンに学んだアリストテレスは、論文の形で哲学的思考を書き記した。それがなかったら、欧州の哲学は別の形をとっていただろう。そういう論文の形をした哲学的思考を読み、考えることも、著者と読者の間に成り立つある種の対話だということもできるだろう。

それに対して、現代のフランスの哲学者、デリダは、自分の著作を聴衆の前で読み上げて討論するという形で哲学的思考を展開しているようだ。著作は、いったん作品として完成すれば、著者から独立し、著者も含めた人々に繰り返し読まれることによって新たな考えが生まれる、という思想が背景にあるらしい。すると、著作は、著者から独立したいわば公共財になって、人々の間に対話を引き起こし、その対話を通して新しい考えが誕生するのを助ける「助産師」ということになるだろう。哲学カフェの記録がそのように使われる可能性はあるし、それはそれで有意義なことだ。

さて、「シネマ哲学カフェ」の報告である。本年度は昨年度に引き続き対面で実施した。昨年度鑑賞したドキュメンタリー作品「教育と愛国」(2022年)の配給会社が、ヨルダン川西岸のパレスチナ人の居住地を描いたドキュメンタリー作品を広報しているのが目に留まり、それを取り上げた。『壊された5つのカメラ——パレスチナ・ビリンの叫び』である。

一昨年10月7日のイスラム組織ハマスとイスラエルの軍事衝突から1年以上経っても、イスラエルのレバノンへの侵攻・イラン空爆、イスラエル軍のガザ地区への侵攻は続き、パレスチナ側の死者は4万人以上を数えていた。『壊された5つのカメラ——パレスチナ・ビリンの叫び』はその時期に取り上げるにふさわしい作品だと思われたのである。実際、この作品は、パレスチナがなぜこのような事態に至っているかを知る上で貴重なドキュメンタリー作品だった。ヨルダン川西岸地区のビリン村に住む農家のイマード・ブルナートが、家族の成長とともに分離壁の建設などイスラエル人の入植が進む過程を5年かけて映像に収めた作品であり、アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭の観客賞・審査員特別賞、フランスのシネマ・デュ・レエル・ルイ・マルコレル賞など世界の映画祭で受賞を重ねている。

イスラエルのガザ地区への攻撃は、パレスチナの武装勢力ハマスによるイスラエル人への攻撃がきっかけだったとはいえ、それに対する防衛の域をはるかに超えている。見るに耐えない、聞くに堪えない状況が日々伝えられるが、パレスチナ人に対する暴力はそれに始まったことではない。ヨルダン川西岸でも、イスラエルの暴力は日常なのである。それも長い年月に渡って。強い憤りと、それを止めることができないという強い無力感にとらわれた。

映像鑑賞の後、いつものように、6~7人のグループに分かれて対話を行った。今回は、残念ながら、参加者が少なく、グループが二つしかできなかった。そういえば、春学期にイスラエルのパレスチナ人に対する暴力に抗議して学内で活動していた学生たちがいたが、あの学生たちはどこに行ったのだろうか。

以前も書いたことがだが、「シネマ哲学カフェ」の悩みは、映像作品の鑑賞にかなりの時間を取られるため、対話の時間を十分確保できないことだ。だが、前回の経験から、それでも対話

の時間を設けるほうがよい、と考え実施した。報告者が進行役をしたグループでは、短時間ながらもみんなで考えることができた。これまでパレスチナ問題のことは知らなかったけれど、今回のガザ地区の事件で知るようになり、何かしなければという思いで来たという学外からの参加者もいた。もう一つのグループでは、進行役が不在だったため、特定の人が話しを独占するという問題が生じたようだ。対話の進行役は、哲学的対話にとってはとても大切なものだが、適格な進行役を常に用意するのは難しい。今後の課題としたい。

「ソフィア哲学カフェ」と「シネマ哲学カフェ」は、対面でもオンラインでも、これからも続いていく。

寺田 俊郎（てらだ としろう）
（グローバル・コンサーン研究所、上智大学文学部）